

平和祈念文集



▲佐々木禎子さんの遺族から寄贈を受けた「禎子鶴」
(アビスタ1階に常設展示)

長崎派遣を終えた後、派遣中学生は感想文を作成しました。
派遣を通して感じたことや平和への思いが、派遣中学生それぞれの言葉で綴られています。

我孫子中学校 2年 岡 智希

平和とはどのようなことか、今回学びました。3日間過ごした中で、私が思う平和は「世界の人々が毎日ごはんを満足に食べられること」が最終的には平和の形であると、派遣を終え考えています。

なぜなら、戦争とは、国と国との争いで他の国と対立したり、不満があったりしたりすると起きると思います。また、食料がうばわれたり、兵隊たちに送られてしまったりもします。また、食料がないとうばい合いや、争いが起きたりします。つまり、食料が無いことは争いの引鉄になるのです。

しかし食料があればうばい合いも起こらず、争いも起きません。そのため、国と国とが対立することもなく、平和な世界になると思います。つまり、全世界の人が満足に食べられる世界が来たとします。すると、この世界の中から戦争が消えたということ、つまり平和だと思います。だから、全世界の人が満足にごはんを食べられるようになれば、平和な世界であると私は思います。

しかし、それにも条件があると思います。それは「核兵器」がない、ということです。人間はどうしても腹を立てたり、イライラしたりする生き物です。だからささいなことで仕返しをしようとする。そしてその小さなことが積み重なり、やがて争いに発展してしまいます。その時に核兵器があるとあっという間に世界大戦になり、とても地球が暮らせる星ではなくなってしまうと思います。

令和元年8月9日、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典で、長崎市の田上富久市長の長崎平和宣言の中で印象深い話がありました。

それは、『原爆は「人の手」によってつくられ、「人の上」に落とされました。だからこそ「人の意志」によって、無くすことができます』という話でした。

なぜこの話が印象に残ったかという、核兵器廃絶という話はよく聞いています。しかし、核が無くなっているようには思えません。だから、人の意志によって無くすということに共感したからです。そして、実際に核兵器を無くすことで地球に平和が訪れると思いました。

これが、私が長崎派遣団の一員として考えたことです。長崎に行く前までは、平和とは戦争がない世界だと思っていました。しかし、長崎に行き、考えが大きく変わりました。

まず、戦争がなくなるからといって平和ではないということです。なぜなら今の世界がそうだからです。今は、戦争はほとんどありません。しかし、平和であると言い切ることはできません。



次に原爆についてです。原爆がおそろしいことは前から知っていましたが、今回改めて衝撃を受けました。特に印象に残ったのは浦上天主堂の遺壁です。石やレンガで頑丈に作られているのに、風之力だけでそれが動いてしまうというのが印象的でした。これは実際に見てみて初めてわかりました。また、長崎原爆資料館では熱線・火災・爆風・放射線などの被害が見られ、原爆のおそろしさを改めて感じました。

そして、2日間参加した青少年ピースフォーラムはとくに印象に残りました。その中で一番覚えているのは被爆体験講話と意見交換会です。

被爆体験講話では、被爆者である築城昭平さんのお話を聞きました。被爆者の方の話聞くのは数少ない機会でした。お話では被爆直後の貴重な話を聞くことができました。そして、話を聞いた後にこのような話もうすぐ聞けなくなってしまうのだなと思いました。もう74年も経ち、被爆者の方が少なくなっていくので、自分達が語りつがなければいけないなと思いました。

また、意見交換会では現在の平和について話し合いをしました。その中で、世界の状況や平和とは何か、平和のために取り組んでいる人や活動などについて意見を交換しました。それらの議題では、自分の考えている意見と正反対の人や、違う視点から見ている人もいて、意見を共有することでより深く平和について考えることができました。また、最後の議題である自分が平和のためにできることでは、自分のできることを書いただけではなく、他の人の意見もみて、さまざまなことを感じました。

今回長崎に行けて本当に良かったと思っています。なぜなら平和について考えて普段はできないような体験をし、貴重な話や資料を見たり聞いたりできたからです。今回の3日間を通して平和について学び、とくに驚いたことがあります。それは海外から来た方です。平和祈念式典だけでなく道を歩いている時や電車の中などでもよく見かけました。また、平和公園内にはいろいろな国から送られた平和を願う像があり、平和を願っているのは日本だけではなく、世界共通なんだなと感じました。これからは、この3日間体験したことを生かしながら、友達などの他の人にも話せるようにしたいです。

我孫子中学校 2年 稲見 帆夏

原爆は「人の手」によってつぐられ、
「人の上」に落とされました。

これは長崎市長の田上富久さんの言葉です。

長崎派遣 1 日目、長崎空港について私たちはまず、青少年ピースフォーラムに参加しました。そこで、被爆体験者の築城昭平さんの講話を聞きました。その内容は実際に被爆を体験されているからこそできるものであり、私にははかり知れないものでもありました。今の生活がどれほど安全で幸せに過ごすことができているのかを感じることができました。



講話が終わると、被爆建造物のフィールドワークを行いました。実際に自分の足で長崎市内を歩き参加しました。普段くずれんなんて考えられないような鐘がくずれ落ち、柱がずれている様子を目で見て感じることができました。今の長崎市は埋め立てているそうです。そのため、地中には原爆により亡くなった方の遺体や遺品が埋まっているかもしれないと知りました。私は普段、市民の人々はどのような思いで暮らしているのかとても気になりました。

夜は長崎市内の美しい夜景が一望できる稲佐山の山頂までロープウェイで登りました。長崎の夜景は日本新三大夜景、世界新三大夜景としてモナコ、香港と並びます。頂上から見わたす街はとてもきれいで美しく、本当に 74 年前、ここに原爆が投下されたのだろうか疑問に思ってしまう程でした。また、街はとても広く、原爆の威力がすさまじいものであったと改めて思いました。

2 日目、8 月 8 日は長崎に原子爆弾が投下された日です。私は「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」に参加させていただきました。式典の前には来場者へのインタビューを行い、その中には広島市の被爆者の孫という方がいらっしゃいました。「長崎市の原爆は広島ともつながっていると考え、しっかりと学びたい。忘れてはいけない。だから毎年足を運んでいる。」と答えてくれました。私はこの言葉にとっても心を打たれ、二つの被爆地に対する考え方が少し変わりました。

式典では日本を代表する政治家が献花を行い、スピーチをしていました。その中でも私は、最初にも書いた長崎市長の言葉が心に残りました。

原爆は「人の手」によってつぐられ、「人の上」に落とされました。だからこそ、「人の意志」によって、無くすことができます。

人が人を殺すためにこんなに恐ろしいものをつくってしまった。その過去を変えることはできません。だから、私たち一人ひとりの考え、意志が大切になってくるとわかりました。被爆者の方の、「平和への誓い」は平和への強い願い、核兵器廃絶への強いうったえがあり、これを私たちもしっかりと受け継いでいかなければならないと強く感じました。

夜、グラバー園を訪れました。グラバー園は稲佐山とはまた違う長崎の夜景を見ることができます。長崎には原爆が投下された、という歴史だけでなく江戸、明治の様々な歴史的建造物などの文化が残されていることを肌で感じることができました。夜には園内がライトアップされ、とても幻想的で美しかったです。旧三菱第二ドックハウスなどは、外国の文化と日本の文化が入り混じっているように思いました。今でも市内を路面電車が走っており、外国と交流のあった長崎だからこそその独特な雰囲気はとても新鮮でした。

3日目は長崎歴史文化博物館に行きました。これまでは原爆を中心に学んでいましたが、歴史、文化の事をしっかりと考えながら見学することができました。2日目の夜、グラバー園で感じた事、思った事をさらに深められました。江戸時代の奉行所、街並み、明治時代にかけての産業発展などとても興味のあるものばかりで、私にとって良い体験になったと思います。

3日間長崎へ行き、実際に足を運んだからこそ感じられることが沢山ありました。これは私の中ではすごく大きな出来事でした。

私が長崎派遣へ行きたいと思った理由は、戦争が嫌いだからこそ被爆地を自分の目で見て、一体何が起こっていたのか真実を知りたかったからです。足を運び帰った今、戦争、原爆に対してまた新たな思いが私の中に生まれました。それは戦争、原爆は残酷で悲惨なものでしかないということです。亡くなった方はもちろんのこと、家族、友人、大切な人を亡くし、生き残ったとしても原爆の熱線、放射線により体だけでなく心にも傷を負ったたくさんの人々。実際に体験した者でなければわからない事実や人々の思いがそこにあることを知りました。3日間貴重な経験をさせていただき、私の一生忘れることのできない大きな財産となりました。だからこそ長崎で学んだこと、感じたことを通して、これから自分ができることは何か考え継いでいきたいと強く思いました。学校の仲間とは違う、長崎派遣 12 人で過ごせた3日間はとても楽しく思い出に残るものでした。ありがとうございました。

湖北中学校 2年 佐藤 皓介

「原爆」。毎年8月になると、テレビからよく流れてくる言葉、新聞によく書かれる言葉です。僕は、「原爆」という言葉を聞いて、広島に投下された爆弾であること、長崎に投下された爆弾であること、アメリカ軍が投下した爆弾であること、そして、それによってたくさんの人の命が奪われたことくらいしか知りませんでした。



2019年8月、僕は我孫子市長崎派遣団の一人として、長崎県を訪れることになりました。出発前は、「台風の影響はないかな。」とか、「暑そうだな。」などの、天候の心配を主にしていました。

現地に到着し、まずは青少年ピースフォーラムに参加しました。被爆体験講話ということで、被爆された築城さんのお話を聞きました。築城さんは、18歳で被爆され、全身火傷という重傷を負ったということでした。戦争のために、自分の好きなことができなかつた日本だったこと、原爆が落とされた時の状況などを聴くと、改めて戦争の悲惨さや残酷さを痛感しました。また、築城さんは、世界の人達が原爆のことについて知ることによって平和が訪れると話されていました。僕は、その意見に賛成です。しかし、同時に、そのためには自分達が戦争の恐ろしさを伝えていくことが不可欠であるとも思います。なぜなら、築城さんが話されていたように、戦争が終わってから74年が経った今、被爆者の平均年齢が上がり、伝えていく人が少なくなっているからです。

翌日の8月9日、僕たちは平和公園で行われた長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列しました。その日は、74年前に長崎に原爆が投下された日です。その式典では、長崎市長や被爆された方からのお話がありました。また、被爆者だけでつくられた合唱団が、平和を訴えるために合唱したり、想像していた以上に長崎では平和活動がたくさんあり、とても驚きました。そして、僕も、もっとたくさんの平和活動を知り、伝えていかねばと思いました。

その日の午後、僕達は、青少年ピースフォーラムに再び参加しました。グループに分かれて、平和についてたくさん話し合いました。そこで、同年代の人と意見交換し合うことで、「平和」には様々なものがあり、一人ひとりの思っている「平和」の意味は違うのだということ学びました。

僕達は、戦争を知らない世代です。そのような僕達にとって、このような話し合いは、これから先の世の中、戦争という悲惨な出来事を二度と起こさないという決意を確かなものにするために、とても有意義な話し合いだったと思います。

続いて僕たちは、長崎原爆資料館と国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館を見学しました。資料館には、たくさんの写真や物が展示されていました。焼きただれた人の顔が写っている写真や高温で溶けたガラス、中のご飯が真っ黒焦げになった弁当箱、それから高温でガラスと焼けた手がくっついているものなど。これらの展示品から、今まで以上に原爆の悲惨さ、破壊力の強烈さを強く感じました。また、犠牲となった人達や被爆された方々、遺族の方々の怒りや悲しみ、無念さが僕の心に伝わってきました。

正直、ここまで人や物に影響が出るとは思っていなかったのですが、自然に足が止まってしまう時やその場から立ち去りたくなる写真がたくさんありました。また、屋外がとても暑かったため、エアコンが効いている館内は、少し肌寒いと感じるほどでしたが、原爆が投下された時は、その暑さなんか比較にならないほどのものだったと思います。

長崎派遣の出発前は、天候のことを主に心配していましたが、天候の良し悪しという問題は、原爆投下や戦争と比べると本当に小さなことだと恥ずかしくなりました。3日間の長崎派遣は、今の自分にとっても、これから先の未来の自分にとっても、とても良い経験となったと思います。

今、世界の中では、核兵器を保有し、開発を行う国々があります。現在の世界の技術力を考えると、今開発されている核兵器は、74年前よりもっと莫大な被害をもたらすものであることは間違いありません。僕は、青少年ピースフォーラムの参加で、人それぞれの「平和」があり、身の回りのものを人それぞれが思う「平和」にしていくことで、最終的に世界の「平和」につながっていくのだということを学びました。

この、「身の回りのもの」を安心して「平和」にしていける環境をつくるために、まずは、戦争は絶対に起こしてはいけないこと、そして、核兵器を決して使ってはいけないという声を、この先も絶やさずに伝えていくことが大切だと強く感じました。また、このことを自分だけで伝えていくのではなく、一人でも多くの人に語り続けられるよう、この機会を頂いた僕達が先頭に立って、戦争、原爆の恐ろしさを伝えていきたいです。

多くの経験や知識を得ることができたこの3日間を、絶対に無駄にしないで、僕にできることを一つ一つ確実に実行し、一日一日を大切に生きます。

湖北中学校 2年 岡島 舞衣香

私はこの長崎派遣を通してたくさん原爆についてや、それによる被害などを知ることができました。

1日目、長崎についてから、ピースフォーラムをしました。グループに分かれて各コースを回りました。私たちのグループでは、「浦上天主堂コース」を回りました。このコースでは浦上天主堂の歴史などを学びました。

浦上天主堂は爆心地からおよそ 500 メートル離れている所にあります。その天主堂は原爆の投下で破壊されてしまいますが、その 14 年後の 1959 年に再び建てられました。その天主堂にはマリア像がありますが、そのマリア像は爆風の影響により指が欠けていたり、天主堂の鐘が落ちてしまったりと、爆風だけでも大きな被害があることなど知りました。これを知る前に体験講話を聞きました。この原爆の被害にあった人の体はみんな真っ赤になり、人なのか、男女の区別もつかないくらい皮膚がたれてきたりしてすごい被害だったそうです。

ピースフォーラムは2日目にも交流会がありました。他の県から来た子と意見を交流し合うことができました。最後に2人組で、自分が今平和のためにできることを考えました。自分たちが考えた意見とは違う意見をほかの人は言っていたりして、たくさんの意見を聞くことができました。また、平和とは何かを一人ずつたくさん考え意見を交換すると、身近なことできていることが平和なんだと改めて感じることができました。

この日にはピースフォーラムをする前に平和式典に参加しました。そこには原爆で亡くなってしまったご家族など、広島から来ている人や、外国人の方もいらしていました。式典では原爆で亡くなってしまった人の悲しみを、この自分の肌で感じました。

長崎原爆資料館の見学、国立長崎原爆死没者追悼祈念館の見学もしました。放射線や、やけど、後遺症などくるしむ人々の姿を写真で見ました。また原爆の放射線の強さなども知りました。原爆の煙には家や巻き込んだもの、汚れなどが巻き込まれ、白くなった煙は水蒸気になり、上空の1万キロメートルほど上にあがったそうです。原爆が落ちた回りには住宅地があり、爆心地をはさんで1キロメートルに大きい工場がありました。工場に落とさなかった理由は、日本には原材料がなかったため、何も作れるものがありませんでした。そうすると、そこに投下してもむだなため、町の中央に投下しようとしたのですが、その日は雲がかかってその中央地が見えなかったため、長崎市の第2目標の場所に投下されてしまったのが、今の爆心地とされている場所です。その表面温度は3千から4千度とされていて、ものなどが置いていなかった所だと水が全部蒸発し、まわりや表面がぶつぶつと空気が抜けたようなあとが残っていました。原爆が投下されると、葉はすぐに焼けると思っていましたが、焼けないで残っていました。その残っていた理由は、原爆がどれだけ早く爆発



したかがわかるものでした。またガラスやビンなどが溶けて固まっていたり、ガラスが溶けて水滴のように垂れてビーズみたいに小さい丸形で固まっていたりしました。この二日間の間では、平和のことについて考えたり、原爆の被害をもっとくわしく知ることができました。

3日目は、長崎歴史文化博物館の見学に行きました。昔には辞書ではなくオランダ語を学んだりするのも貴重だったそうです。また昔に使っていた道具なども見ると、字を書くにもえんぴつなどではなく筆だったり、書く紙が巻き物や半紙だったり、花びんなどではなくつぼがたくさんあったりと、今ではあまり見ないようなものまで見て学ぶことができました。また、チームラボもあり、自分で色をぬった絵がスクリーンなどに映せたりと、違う楽しみ方もすることができました。

この3日間を通して、ピースフォーラムでは原爆で起こったこと、今自分達が平和のために何ができるかを考えましたが、それを行動に移していけるようにします。2日目に行った平和祈念式典では、これからは味わえない悲しさを感じたので、その悲しみを忘れずに、心に留めながら生きていきたいと感じました。

平和とは、戦争などをしない、核兵器を持たない、使わない、ということだけではなく、ご飯が食べられる、水がおいしい、安心して寝ることができる。こういった安心して生活を送れることが平和だと私は思いました。これを自分だけではなく、あまり詳しく知らない人とかにも伝えて、今よりも平和だと思える暮らしを作っていきたいです。

布佐中学校 2年 鈴木 友瀬

私たち派遣中学生はこの3日間さまざまな体験をし、非常に充実した日々を送ることができました。

1日目、初めに青少年ピースフォーラムに参加しました。そこで被爆体験講話に参加しました。実際に被爆された方の話を聞くと、原爆の悲惨さをより感じました。話では戦争中には、勉強もスポーツもできなかったと聞き、今の生活では考えられないことでした。今は生活になくはならない物になっているので、二度と繰り返してはいけないことだと感じました。



今回話を聞いた被爆者の方が生き残れた理由を聞きました。それは、布団を頭からかぶっていたからだと言っていました。常に爆弾が落ちてきた時のために用意をしていたのはすごいと思いました。

私には一つ頭に残っている話があります。それは、放射能のことについてです。原爆が落とされた時の日本の軍隊は、海岸から進入されるのを防ぐため、海沿いで待ち構えていました。そのため長崎に落とされた時には爆風を受けませんでした。しかし、救助のために長崎に向かい、救助をしていると一ヶ月後くらいで倒れて死んでしまったのです。これが原爆病という放射能の影響で死んでしまう病気です。当時日本は原子爆弾の事について詳しく知らなかったため、多くの方がその原爆病という病気で亡くなってしまい、その被害がすごく大きかったと聞いて印象に残りました。

被爆体験講話の後、フィールドワークに参加しました。私は、山王神社コースに参加しました。山王神社コースには、長崎医科大学や、その旧正門、一本柱鳥居などを周りました。長崎医科大学は鉄筋コンクリートで作られていて、形だけは残って中が飛ばされるという被害を受けたそうです。他にも旧正門は爆風の影響でかたむいてしまいました。一本柱鳥居は名前のとおり、柱が一本だけになってしまう被害を受けました。

このコースは広い範囲を歩きました。旧正門や、一本柱鳥居は場所が離れています。なのに同じような被害を受けていて、爆風による被害の範囲の広さと、その威力の強さを感じました。

1日目の最後は稲佐山に行きました。そこで見た夜景はすごくキレイでした。そして、この町の真ん中に今、原爆が落ちたらと考えたら、長崎だけでなく日本全体に影響を与えたいと思いました。長崎は昔から世界との貿易の窓口となる都市で、長崎がなくなると日本中の人が安定した生活を送れなくなってしまいます。でもそれは、長崎だけでなく日本全体どこに落とされても同じことだと思います。なので私たち派遣団が感じたことをみんなに伝え、もう二度とこの世界に原子爆弾を落とさないようにしたいと思いました。

2日目は原爆が投下された8月9日です。祈念式典が行われました。たくさんの方がいて、こんなに多くの方が平和を願って参加していて、すごく良いことだと思いました。日本人だけでなく外国人も来ていたのと、広島の方が来ていたのは、心が温かくなりました。

午後からはピースフォーラムに参加し、前日とは違い、室内でグループに分かれ意見交換をしました。平和とは何かを考えました。自分の考えを周りに伝えられたし、他の人の意見を知ることができました。それは、私の考えを広げるものでした。

印象に残った他の人の考える平和がいくつかあります。一つ目は、「一日三食を毎日食べていること」です。世界にはご飯を食べられない人がたくさんいます。その中で、日本人の多くは毎日ご飯を食べているので平和という考えの人がいました。

二つ目は、「あたり前のことができ、笑顔でいられること」という人もいました。どちらもそんな風に考えたことはありませんでした。私は、核兵器を世界から無くすことだけが平和だと思っていましたが、今回の意見交換を通して、考えが広がりました。

その後に行った資料館では、実際の写真を見て、より深く戦争、原爆の悲惨さを感じることができました。

最終日の歴史博物館では、原爆や戦争だけでなく、長崎の暮らしや文化など展示もある博物館でした。企画展ではピースラボをやっており、楽しみながら歴史を学ぶことができました。

このように、この3日間は日程も忙しかったですが、充実した3日間を過ごすことができました。この経験をこれからの人生の中で役立てていきたいと思います。

布佐中学校 2年 五定 舞桜

「核兵器廃絶」。

この言葉は、今年 74 周年を迎える長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参加した時、被爆者代表の方が、平和の誓いの中で何度も何度も語りかけてきた言葉です。この言葉の中には、被爆当時を経験したからこそ言える原爆の恐ろしさ、長崎を最後の被爆地にしたいという思いを訴えてくるように感じました。



私はこれまで、長崎への原爆投下について、テレビや本を通じてでしか学んだことがありませんでした。原爆の威力やその後の被害を体で受けたことも、被爆を体験した方のお話を直接聞いたこともありません。そんな私でも、調べられる範囲で、原爆についてや、その後の影響について学びました。そして 8 月 8 日から 8 月 10 日までの 3 日間、我孫子市の代表として、長崎派遣に参加しました。

長崎に行く前の 7 月 25 日に、私たち派遣団は事前説明会を行いました。そこで、私たちと共に引率して下さる方の中に、的山さんという女性がいました。的山さんは、原爆が投下された当時、爆心地から 2.4 キロメートルほどの場所でお母さんのお腹の中で被爆しました。

事前説明会では、被爆の影響や当時の様子を詳しくお話して下さいました。母体の中の子にまでも影響をもたらす原子爆弾の恐ろしさを実感して、現地に行くまでの心の準備ができました。

そして 1 日目、長崎に到着し、平和公園内で行われる青少年ピースフォーラムに参加しました。ここでは、被爆当時 18 歳で、工場に勤務していた築城昭平さんという方の被爆体験講話が行われました。築城さんのお話の中で、現在世界では、約 1 万 4 千発の核兵器が存在しており、自分の国を守るため、又は、他国を攻撃するために保有されていると聞きました。私はそれを聞いて、保有国が本当に核の恐ろしさを知っているのか、築城さんのような人が、保有国にいれば、核の被害や恐ろしさが伝わるのかな、と感じました。

そして、築城さんのお話が終わり、フィールドワークに移りました。私が見学した平和公園コースでは、平和の象徴である平和祈念像や当時、水を求めて亡くなられた方をいたわるために作られた、平和の泉などを見ました。

そして夜には、稲佐山の山頂に登り、長崎の美しい夜景を見学しました。そこで私はその夜景の美しさから、74年前の悲惨な光景を全く想像できませんでした。純粹に、いつまでもこの美しい景色が続いて欲しいと思いました。

2日目。平和公園に移動し、平和祈念式典に参列しました。式典の中で、長崎市長、田上富久市長による平和宣言がありました。その話の中で、

「原爆は人の手によってつくられ、人の上に落とされました。だからこそ、人の意志によって、無くすことができます。そして、その意志が生まれる場所は間違いなく、私たち一人ひとりの心の中です。」

という話を聞いて、私もその一人ということをおぼえてはいけないと強く思いました。

式典が終わり、青少年ピースフォーラムに参加した後、原爆資料館を見学しました。

その中で、最初に目に留まったものが、「ファットマン」という名称の実際に長崎に投下された原子爆弾の模型です。その模型の前で資料館の方に、この原爆が投下される前にアメリカで何度か投下の実験が行われ、その実験によって被爆してしまった人がいるという話を聞きました。その話を聞いて、私は自国の人を巻き添いにしてまでやらなければいけなかつたことなのか、疑問に感じました。

自国の人までも簡単に犠牲にできてしまうという感覚が、戦争なのかなと思いました。

その想いは長崎派遣の間、私の中でずっと存在していたものであり、日本も同様、誰に何の権利があつてこのような残虐行為が行われたのか、強い怒りを感じました。

最後に、今回の長崎派遣を通して、自分が強く思うことは、まず初めに、長崎への原子爆弾投下ということが決して他人事ではなく、自分の身に起こり得る出来事だと思いました。だからこそ、74年前のあの日の犠牲の下に今の平和があるということをおぼえてはいけないと思いました。

同時に、私たちが今過ごしている平和な日常を当たり前のものだと思わずに、戦争で犠牲になった人たちへの感謝の気持ちを忘れずに、一日一日を大切に生きていきたいと思つました。

また、今の平和な日本を維持していくために、私が明日からできることは、この想いを大人になつても決して忘れないこと。そして、自分が親の世代になつた時、自分の子ども、次の世代の人にしっかりと伝えて戦争の悲惨さ、平和の尊さを風化させないようにしたいです。

湖北台中学校 2年 齋藤 向太

私は、今回の長崎派遣で学んだことがたくさんあります。それをその時の様子も説明しながら3つほど紹介していきたいと思います。

1つは、原子爆弾の恐ろしさです。被爆者達の体験談を聞いて、その恐ろしさと、今後二度と使用させてはいけないという気持ちが強くなりました。被爆者の築城さんの話で、「私は布団を被っていたおかげで助かった。」と言われていました。その時、少しの工夫や少しの対策だけで今後の人生が変わるんだと感動しました。



また、築城さんの話では、「原爆のせいで人が人の形をした何かにしか見えなかった。」とも言われていました。そこでも原爆の恐ろしさが分かります。

また、1日目の青少年ピースフォーラムで、私は浦上天主堂コースでしたが、そこで鐘楼ドームというところがありました。それは、浦上天主堂の左の塔でしたが、原爆の爆風によって落ちてしまったもののようです。そこから原爆の恐ろしさ、そして、そんな丈夫そうな建物を吹き飛ばしてしまうような爆風、それが人に当たっていたと考えると、とても怖いと感じました。

もう1つ感じたことは、平和の尊さ、大切さです。原爆について話してきましたが、今の日本は果たして平和なのでしょうか。私はそうではないと思います。なぜなら、今世界では、約13,880個もの核爆弾が保有されています。私たち日本に直接的に関係してなくても、核爆弾が作られているのは本当のことです。核が今も作られていて、日本にいつ来るか分からない状態なら、平和ではないと思います。それに世界中を見たら分かりますが、まだ小さな紛争が続いています。こんなことが続いているのは、まだまだ平和とは言えないと思います。

青少年ピースフォーラムで平和とは何か、ということをやりましたが、色々な意見が出てとても面白かったです。例えば「当たり前のことを当たり前のようにする」や「日常を送る」などと書いた人もいました。実際に当たり前のことが当たり前に行えるというのは良いことだと思います。お風呂や食事でも、戦争中は不自由でした。それが今はできるようになったと考え、とても平和なことなのだと共感しました。また、「笑ってられる日々を過ごす。」と書いている人がいました。これは、自分で全く考えていなかった発想で少し驚きました。聞いてみると、「笑うということは、楽しいということ。楽しいということは、幸せということ。幸せだったら平和。」と言っていました。この考えに感動しました。たしかにその通りだと思いました。このように、平和というものは様々で、人によって考え方は違うけれど、今の日本には足りないものが多いと思いました。

そして最後は、これから私たちが前の2つのことを広く伝えて行きたいと思ったことです。今の日本は色々な課題があり、他国とケンカのような状態になっていると思います。だからこそ、原爆の恐ろしさや平和の尊さを伝えていくべきだと思います。被爆者が少なくなってきた今、あのような悲しい出来事を二度と起こさないように広めていくことが大切だと思います。そのためにも派遣生で協力していく必要もあると思いますし、被爆者のためにも自分達がしていくべきだと思います。今回の派遣でそのことを強く感じました。

話は少しずれますが、青少年ピースフォーラムで平和のために取り組んでいる人や活動紹介というセクションがあり、サッカー選手など色々な人の名前が多く出ていました。自分もこんな人たちのように平和を広め、平和のために活動していきたいと思いました。

最後にまとめのようになりますが、私は今回の長崎派遣に行けてとても良かったです。なぜなら私は今まで、平和というものについて考えたことがなかったからです。平和について考えるのは難しいし、あまり関係のないことかな、と正直思ってしまった自分がいました。しかし、そんなことはなかったと長崎派遣に行ってみると気づきました。今を生きる自分達だからこそ、平和について考えるべきだし、考えなければならない、そう改めて思いました。

今回の長崎派遣は、私の心と気持ちを変えてくれましたし、とても良い経験をする事ができました。これからも私は、前の3つの「原爆の恐ろしさ」、「平和の尊さ」、「平和を伝えていく」ことを意識して、これからの人生を歩んでいきたいなと感じました。この経験は大人になっても絶対に役に立つと思います。良い経験をありがとうございました。そして、大人になったら、もう一度長崎に行ってみたいと思います。

湖北台中学校 2年 飯田 愛菜

私は今回の長崎派遣に参加するまでは、原爆や戦争のことについて授業で教わる程度の知識しかありませんでした。そのためこの派遣で見たり聞いたりしたこと一つ一つが、私にとって原爆や戦争、平和について知り、考える良い機会となりました。

1日目は、青少年ピースフォーラムへ参加しました。そこで、被爆者の築城昭平さんの講話をお聞きました。築城さんは、18歳の時、爆心地から1.8キロメートル離れた学校の寮で被爆しました。原爆投下直後は、昼間なのに真っ暗で、「シーン」としていて、まるで死の世界のようだったとおっしゃっていました。そして周りにいた人達は、酷い火傷で顔が分からない状態だったそうです。そのお話から原爆の悲惨さを改めて感じました。



その後、グループに分かれてフィールドワークに行き、実際に町に今も残っている被爆したのを見に行きました。医科大学の正門門柱は爆風を受け、7トンもある門柱は9センチメートルずれ、前のめりに傾いてしまっています。次に訪れた山王神社には、元々4つの鳥居がありました。今は一本柱鳥居と呼ばれる鳥居のみ残っています。この鳥居は爆風により笠石が捻じ曲げられ、爆心側の左半分が吹き飛ばされてしまいました。鳥居を左の柱があった所から見上げると笠石が曲がっていることがよく分かりました。また、柱に触ると爆風の影響を受けた側は刻まれていた文字が消えていました。爆風がどれほど強いものだったのかを実感しました。最後に、境内にある被爆クスノキを見ました。このクスノキは原爆を受けて一時は枯れ木同然でした。しかし、奇跡的に再び芽吹き樹勢を盛り返し、今も青々とした葉を茂らせています。この奇跡は被爆した方々に生きる希望を与えました。私はそのクスノキに、被爆したとは思えないほどの生命力と力強さを感じました。

その夜行った、稲佐山からの夜景は、とてもきれいでした。それと同時にこの場所に原爆が落とされ、一瞬で破壊されてしまったと思うと、とても悲しくなりました。

2日目は、平和祈念式典に参列しました。被爆者代表の方の話で原爆が投下された後の家族に起きた生々しいお話を聞き、今の私たちはいかに幸せな毎日を過ごしているのかと考え、感謝の気持ちでいっぱいになりました。また、平和宣言からは、世界から核兵器を無くしていこうという強い気持ちともう二度と同じことを繰り返してはならないという思いを未来へ受け継いでいくことの大切さを思い知りました。式典には、若者や外国人まで平和宣言や被爆者の方の話を聞くことで、原爆や戦争や平和について関心を持つ人が増え、それが平和につながっていくのではないかと思いました。

式典の後、2回目の青少年ピースフォーラムへ参加しました。年齢も都道府県も違う仲間たちとグループになり平和について考えました。私は、平和とは戦争がなく、みんな平等に暮らすことができることだと思っていました。けれど、意見交換をすると、全く同じ考えを持つ人は一人もいませんでした。いろいろな意見を聞くことで、私の平和に対する考えの視野が広がったように思います。

ピースフォーラム終了後、長崎原爆資料館を見学しました。原爆資料館では、ガイドさんが説明してくださいました。解説文には無いことまで教えていただき、深く学ぶことができました。原爆資料館には、原爆投下時刻で止まってしまった時計、焼けてボロボロになった衣服、手とガラスが溶けてくっついてしまったものなどたくさんの展示品があり、その一つ一つが原爆の恐ろしさ、怖さを物語っていました。そして、私が特に印象に残ったことは、日本に落された原爆に、日本人が発明した八木アンテナというアンテナが搭載されていたことです。日本人が発明したものが街や物を焼きつくし、多くの命を奪う兵器に使われたのです。その事を知り、私は大きな驚きと共にとてもショックを受けました。

今回の様々な経験を通して学んだ、戦争や原爆がもたらした悲劇や平和への思いを受け継いで、伝えていけるようにしたいです。更に大切なことは、ただ伝えるだけでなく、一緒に考え話し合うことだと思いました。まだ、世界には核兵器が必要だと考えている人たちがいます。私は、そういう人たちをはじめ、世界中の人々に原爆の恐ろしさを知ってほしいです。一人でも考え方が変わっていくことが、平和へ近づく第一歩になると思います。私たちは、「核兵器は必要ない！」と声を上げていく必要があります。再び未来で同じ事が繰り返されることが無いように、そして核兵器が完全に無くなり平和な世界になることを切に願います。

久寺家中学校 2年 山田 叶真

私は、長崎に一度訪れたことがあり、その時は観光でありながら少し原爆、戦争について知っていた気でいました。しかし、長崎派遣で学べたことと比べたら浅く、わずかな知識でした。

前に訪れた時は、原爆は人を殺す危険な物と思っていましたが、今回では、人を殺し、建物をこわし、人を長年にも苦しませる物だと思いました。

そして、的山さん、築城さん、山脇さんによる被爆者の方々の話では、資料館では分からない原爆の悲惨さを感じることができ、とても貴重な経験になりました。戦争を体験された方々の話をよく聴き、これからの発表でしっかり伝えていきたいと思いました。

核兵器廃絶に向けた活動がもっと増え、全ての人が平和に過ごせる社会をつくりたいと思いました。

まず1日目には、青少年ピースフォーラムに参加しました。そこでは、山王神社コースで長崎医科大学附属医院、旧正門門柱・ゲストハウス・一本柱鳥居・被爆クスノキを見て回りました。

一本柱鳥居では石でつくられていたのに、こわれていて、残った方の表面は爆風を受けた側はツルツルになっていました。次に被爆クスノキでは、木の穴に三千度程の爆風が入り、穴が大きく広がり穴の中にはガレキが入っていました。この2つのことから、石の柱が飛ぶほど、そして木が溶けるほどの風、熱さで原爆の爆発だけでなく秒速 200メートルもの爆風の恐ろしさを知ることができました。そして、その爆風にたえた、ゲストハウス、クスノキは、鉄筋コンクリートであったことや立地によって残り、クスノキは、当時生きる希望になったそうです。そこでは、原爆の恐ろしさを伝えていくための大切な遺構で建物だけではなく自然の物も残されて伝えていくものとなって自然を大切に、物を大切に、原爆、核を無くすべきだと知れました。

そして、その後に訪れた稲佐山では長崎市を見て、原爆による被害がこんなにも大きいのかと思いました。

2日目は、来場者へのインタビュー、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典への参列、青少年ピースフォーラムでの意見交換会、長崎原爆資料館、国立長崎原爆死没者追悼祈念館の施設見学、グラバー園に行きました。

まずインタビューでは、遺族の方など各年代多くの人に積極的に聞くことができ、その人の平和などを知り、改めて平和について考えることができ、良い経験になりました。



次に平和祈念式典では、特に長崎市長の平和宣言での最初の詩が、聞いた時は原爆の被害を生々しく伝えられ少しおどろきました。

しかし、文章中にはとても心に残った所がありました。

「原爆は人の手によってつくられ、人の上に落とされました。だからこそ人の意志によって、無くすことができます。そして、その意志が生まれる場所は、間違いなく、私たち一人ひとりの心の中です。」という言葉です。

この言葉で、核廃絶の強い意志と市民社会の力を感ずることができました。

次に、

「私たち一人ひとりの力は、微力ではあっても、決して無力ではないのです。」

この言葉では、祈念式典に来た人だけでなく、この世界の人に核廃絶運動をしよう、平和を祈ろうと呼びかけているように感じ心を動かされました。

「地道に平和の文化を育て続けましょう。」

この言葉を聞き、自分もリレー講座に参加して、平和の文化を広げ育て続けていきたいと思いました。

この式典では、核廃絶と平和について深く考えるきっかけになると思いました。そして、この式典にも多くの外国の人が参列していて、世界中で平和を祈る人がいて、広島・長崎から発信されたのが届いたのだと思いました。自分も、我孫子・久寺家中で多くの人に12人で平和を伝えていきたいと思いました。

そして私はこの3日間を通して平和について深く考え、青少年ピースフォーラムでも多くの人が考え、意見を交わし。戦争が無くなること、みんなが笑顔であること、国が仲良くなることなど、人それぞれの平和は違いました。そのなかには自分の手でできるものもあります。しかし、この世の中は平和ではないと思います。なので身近にある平和をつくり見つけたいと思います。

最後に、私に平和について学ぶことができ伝える機会をつくっていただきありがとうございました。これからの生活でも平和に向けた活動をしたいと思ひます。

久寺家中学校 2年 工藤 心陽

私は、この長崎派遣に参加して、原爆の恐ろしさや平和の尊さをさらに深く学ぶことができました。実際に、被爆した建物や資料館を見て、今までの想像を遥かに超える原爆の残酷さや悲惨さを知りました。



1日目の青少年ピースフォーラムの活動では、平和公園コースで平和祈念像をはじめとする平和の象徴のモニュメントを見学したり、長崎刑務所浦上刑務支所跡を見学したりしました。平和祈念像などのモニュメントは、世界中からの寄付金で造られたものです。これを聞いて、私は安心しました。なぜなら、私たちと同じように平和を願っている人がたくさんいることに気付いたからです。また、長崎刑務所浦上刑務支所跡を見学した際に、ピースボランティアの方が説明をしてくれました。その内容は、朝鮮半島等で抗日運動を行い、治安維持法に違反したとして逮捕された活動家も収監されていたということや、爆心地から最短の距離で被爆した公共施設ということでした。収監者の朝鮮人は、特にこの世に悔いを残して亡くなったと思います。なぜなら、遠い異国の地で理不尽な扱いを受け、悲劇の死を遂げたからです。

それ以外にも、当時の地層が爆心地の近くに残されていました。その地層には、お茶碗などの食器が埋まっていた。それを見た時、長崎市民の方々の普段の生活が一瞬にして奪われてしまったのだと、とても悲しい気持ちになりました。しかし、稲佐山から美しい夜景を見てホッとしました。原爆で奪われたキレイな長崎市を取り戻すことができ、本当に良かったと思いました。

2日目では、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典へ参列したり、青少年ピースフォーラムで意見交換をしたりしました。他にも、長崎原爆資料館や国立長崎原爆死没者追悼祈念館などにも行きました。長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列して一番印象に残ったのは、山脇佳朗さんの平和への誓いです。実際に被爆した方のお話が聞けるという貴重な体験ができました。山脇さんのお話の中に、兄と父親を捜すというところがあり、その部分はお話の中でも特に印象的でした。原爆により、大きな被害を受けた人はもちろん、残された家族や友達も苦しい思いをするということを知りました。

また、青少年ピースフォーラムの意見交換では、たくさんの人と「平和とは何だろう」と考える活動がありました。他の人の意見を聞くことによって、自分の考えに変化が生まれました。この活動をするまでは、核兵器や戦争のない世界こそが平和だと考えていましたが、青少年ピースフォーラム参加後には、身近なところに平和があることに気づきました。

1日3食ご飯が食べられることなど、現在では当たり前の日常が続くことこそ、意味があるのだと気付きました。

この3日間で一番原爆の恐ろしさを学んだ長崎原爆資料館では、核兵器がどんな悪影響を及ぼしたのか実際に見て、聞いて学ぶことができました。展示されているものの中には、当時と同じ色やサイズで再現された原爆のファットマンの模型があったり、爆心地から1.4キロメートルの所にあった家の壁があったり、原爆の残酷さが伝わる絵や写真がありました。ファットマンの模型はとにかく大きくて、長さ3.25メートル、直径1.52メートルもあり、火薬を使用した爆弾は、4トントラック5,250台分（2万1千トン）相当もあるそうです。この大きな物体がさく裂して人々に痛みを与えたと思うと頭の中が真っ白になりました。そして、もっと衝撃を受けたのは、爆心地から1.4キロメートルのところにあった家の壁の展示物です。なぜ、衝撃を受けたかという、そこには考えられないくらいの光の強さによって写し出された葉っぱの影があったからです。私たちの影が写る原理と同じですが、光の強さによっては焦げたように跡が残ってしまうのです。それくらいの強い光なので、人々は猛烈な熱に全身を覆われてとても苦しんで被爆したのだと思います。

そのこと学んだ直後に、ある1枚の写真が展示されていました。そこには、全身火傷をしたある少年が喉に手を当てて倒れているという光景がありました。その写真は、ある女の子の兄なのですが、それに気づいたのは、原爆が投下されてから10年以上経った時でした。ガイドさんは、家族、兄妹の絆があったからこそ事実気づけたのだと解説をしてくださいました。本当に胸が苦しくなり、締め付けられるような感じがしました。

このように、3日間の長崎派遣を通して、核兵器の怖さを知り、1945年8月9日11時2分に何が起こったのか、被爆した人はどのような気持ちなのか何を感じたのかを数多く学ぶことができました。

この3日間で学んだことが全てではありませんので、今後も自分なりに原爆のことを学んでいこうと思います。そして、平和とは何かを考え、私たちの次の世代へとバトンをつないでいきたいと思います。

白山中学校 2年 本田 拓海

僕は去年、先輩が発表した広島派遣のことについて聞き、興味を持ち始めました。戦争の愚かさや悲惨さを聞き、少しショックを抱きながらも、「自分も戦争、原爆について学びたい。」と思いました。

そして、2年生になり、先生から「長崎派遣に行かないか。」というオファーがきました。もちろん、「行きたいです。」と了承し、行く前に予習をしました。そして、原爆のことについて調べましたが、肌が溶けた被爆者や黒焦げになってしまった被爆者などの写真を見て、やはり話で聞くとときよりもショックを受けましたが、なぜ落とされてしまったのか、なぜ被爆者はこのような目に遭わなければならなかったのかなど、さらに興味を持つようになりました。事前説明会では、被爆者の方の話が聞けて、とても貴重な会でした。



迎えた当日、飛行機で長崎に飛びました。最初のイベントでは、青少年ピースフォーラムに参加しました。1日目は被爆者の方の直接的な話だったり、原爆の爆風や熱などによって影響を受けた建物などを実際に見たりしました。被爆者の方の話では、50分間お話を聞けたので、とても貴重だと思うし、

「核を使った戦争をしたら世界が終わる。」

という言葉が、自分の中でとても印象的でした。

2日目では、様々なイベントがありました。特に印象的だったものが2つあり、1つは長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典です。中でも、長崎平和宣言での生々しい言葉だったり、被爆者代表の山脇佳朗さんの生々しい言葉や総理に対しての叫びだったり印象的でした。

もう1つ印象に残ったものが、長崎原爆資料館と国立長崎原爆死没者追悼祈念館の施設見学です。資料館では、生々しい写真や現物など、当時の悲惨な状況が少しばかり分かったような気がします。また、被爆者の話も印象に残っていますが、写真を見るとさらに現実味がわいて、とても印象的でした。また、2日目のピースフォーラムでは、1日目で学んだことや長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典など、様々なイベントから学んだものを持ち寄って、意見交換会をしました。学徒動員が遺した手紙から読み取ったり、核兵器や戦争に関する世界の状況について話し合ったりしました。その中で自分が印象に残った議題が、「平和とは何だろう？」というものです。その中で自分が特に印象に残った言葉、考え方が、

「当たり前のことを当たり前のようにできる環境が平和だと思う。」

という言葉です。戦争では、教育や運動、遊ぶことなどの、今では当たり前のことを、戦争のときや核兵器が落とされた時には、当たり前ことができなくなっている状況とリンクしたからです。

また、平和のためにできることを花びらに書いてピースアートを作るもので、そのピースアートは普通のアートより感慨深く感じました。

3日目では、長崎歴史文化博物館の見学で、戦争のこと以外にも視野を広げた、出島のことやキリシタン（天草四郎）のことなどについて学びました。今の世界遺産の大浦天主堂がキリシタンと深い関係があることや、昔の戦争についても学ぶことができました。また、グラバー園や稲佐山などの風景や景色などもすごくきれいだと感じると同時に、核のことを学んだからかもしれませんが、原爆1つであの稲佐山から見た景色などが消えてしまうと考えると、すごく恐ろしいと思いました。

僕はこの長崎派遣で学んだことは、特に2つあります。1つ目は、2日目の青少年ピースフォーラムで聞いた、「当たり前のことを当たり前のようにできる環境が平和だと思う。」という言葉で、やはり平和を失ってしまった被爆者は、当たり前のことをできなくなっている悲しさもあります。また、一発で平和を壊す核の恐ろしさを感じました。

2つ目は、教育長が話された、「様々なことを学びましたが、実際には体験していないものです。」という言葉で、反省会で言われていたものです。様々なことを学びましたが、やはり実際はもっと恐ろしかったり、家族や友人を亡くした悲しみはとても深いと思います。

僕が印象に残った言葉の中に共通することは、「恐ろしかったり、悲しい思いをする」ということです。これは、一発の原爆が引き起こしてしまった悲劇です。このような核は、廃止しなければならないと思いました。

また、平和を維持するためにピースフォーラムで書いた平和のためにできることを行っていきたいと思いました。

白山中学校 2年 市川 みなみ

8月8日から10日までの3日間、私は長崎県でたくさんの事を見聞きし原爆や平和について今までより深く考えることができました。



1日目。青少年ピースフォーラムに参加しました。ここでは被爆者である築城昭平さんのお話を聞かせていただくことができました。お話を聞いて資料では感じるのできないその時の気持ちを想像することができました。築城さんは被爆当時18歳、まだ学生だったそうです。長崎に原爆が投下される3日前の広島への原爆投下。このことが当時、長崎の人々には新型爆弾としか伝わっていなかったことを私は初めて知りました。もし、広島での被害の大きさが長崎に伝わっていたら、もっと多くの人々が原爆への対策をし、助かっていたのかもしれない。そんな中で築城さんは多くの幸運が重なり、助かったと話していらっしゃいました。1つ目は空襲警報が鳴っていたこともあり、暑さを我慢し布団を全身に被っていたため。2つ目は、築城さんの寝ていた部屋が柱で支えられており、崩れなかったため。最後に家族の助けによって、薬をぬることができたため。このように数々の幸運が重なったことによって今生きていられるとおっしゃっていたのが私は印象に残りました。

しかし、築城さんが助かったのは幸運が重なったから、ということだけではないと思います。なぜなら、1つ目でもあげたように築城さんは自らの判断で原爆が投下される前の日の夜、布団を被っていたからです。その考えがあったから助かることができたと思います。また、築城さんのお話を聞いて、原爆が長崎にどれほどの被害をもたらしたのかも知ることができました。長崎に原爆が落とされたのは、午前11時2分。昼間のはずが、原爆が投下された時、周りは真っ暗だったそうです。爆心地から1.8キロメートル離れており、布団をかぶっていた築城さんでさえもやけどにより血が出るほど、原爆は人々に大きな被害を与えました。今回、築城さんのお話を聞いて原爆のおそろしさや原爆での被害の大きさを改めて学ぶことができました。

築城さんのお話終了後、被爆建造物等のフィールドワークを行いました。ピースボランティアの方が案内してくださり、旧正門門柱や配電室、二の鳥居など原爆によって被害を受けた建物を見ることができました。

ここでは、柱が傾いていたり、鳥居が半分になってしまっていたりと実物を見て原爆の怖さを感じられる貴重な機会となりました。

2日目。私たちは平和公園へ移動し、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典へ参列しました。この式典で私が感じたことは、平和の伝え方には様々な方法があるということです。式典の中では平和宣言や被爆者の方による合唱など様々な形で平和について伝えている人がいました。また、多くの人が平和について考え、祈っている、そして行動していることを改めて感じることができました。

平和祈念式典後、ピースフォーラムに参加しました。2日目は、主に意見交換を行いました。平和とは何か、について考えたとき、私は一番に戦争や核兵器のない世界を思いうかべました。しかし、おいしいご飯が食べられること、毎日笑顔で過ごせること、などの普段なにげなくしていることも平和なのではないかという新しい意見も取り入れることができました。

この2日間、ピースフォーラムを通して原爆を知り、平和についてたくさんの方の意見を聞くことができ、自分の考えを深めることができました。

その後の長崎原爆資料館では、長崎に落ちた原爆のサイズを表したもの、11時2分で止まった時計、人間の手の骨が高熱により、くっついてしまったガラスなど、その時の長崎の状況を想像できるものが数々ありました。この資料館で改めて二度と世界に原爆が落とされてはいけないと実感しました。

3日目では長崎歴史文化博物館を訪れました。この博物館では、出島を描いた屏風絵やオランダ語の辞書、解体新書などを見て、長崎の歴史を知ることができました。また、今とは違い、昔は書物を読むためにもたくさんの努力が必要だったのだと思いました。また、原爆が落とされていなかったら、今の長崎はどうなっていたのだろうか、今よりもっと発展していたのかもしれないなど、たくさんものことも考えることができました。

この3日間、長崎でしか見ることのできない資料や実際に被害を受けた建物、平和祈念式典に参列するなどして原爆のおそろしさをあらためて知り、平和について考えることができました。そのため、長崎に行って学んできたことを自分以外の人にも共有し、より多くの人に広めていけるよう、今後の活動にも力を入れていきたいと思います。